


 書評

鈴木國文 著

精神科医からのメッセージ **トラウマと未来**

精神医学における心的因果性

十川幸司

『トラウマと未来』という魅力的なタイトルが付けられた本書で、著者の関心が向けられるのは、過去でも未来でもなく徹底して現在というものに対してである。本書が扱っているテーマは、トラウマの臨床から心脳問題、現代のうつ病像の変化から情動の倫理性などと幅広い。この論評では、枚数の制限上、評者が最も重要と考える本書の根本的なモチーフだけを取り出してみたい。

我々の臨床の現場が、この20年の間に大きく変化したことは、精神科医の間の共通した認識となっている。なるほど80年代までの臨床の変化は、向精神薬の発展という科学的進歩に基づくものと一応考えることができる。だがその後も精神科医療は、大した技術的・制度的刷新がないにもかかわらず変化し続けた。この現象をどう考えればいだろうか。一つには精神科医療の守備範囲の拡大といった社会的事情や、DSMという多くの精神科医が侮っていた分類体系が、現場の臨床のみならず、現実の臨床像をも変えてしまったという、分類的知が持つ「現実構成的」な力をその要因と考えることもできる。しかしこのような水準の議論では現在の状況の本質をとらえることはできないだろう。そこで著者が立ち向かうのは近代（モダン）とは何かという巨大な問いである。

著者は近代の原理を、主としてラカンの主体概念に依拠しつつ解きほぐしていく。それを粗削りに要約するなら次のようになる。主体を構成するのは記憶である。この記憶という働きにおいて主体はシニフィアン（言語）に依拠している。シニフィアンの体系は主体に対し、最初に傷（原抑圧）として、その後には差異として働きかける。シニフィアンの体系は主体にとって「外なる臓器」（ジジェク）として機能していたものだが、やがてこの「臓器」は「内部化」し、この「臓器」こそが主体の構造を決定づけることになる。またこ

のように構成された主体は、とりわけ19世紀から20世紀という「近代」においては、主に不安とうつという2つの情動によって絶対的な他者と関係する。主体を倫理的に形成するのは、これらの情動なのである。

かつての「近代」の危機は、このような主体の構造を形づくる「外なる臓器」の機能不全によって生じたものである。そうした状況こそが、ハイデガーやベンヤミンらの哲学を生み出す「ポストモダン」的な時代の雰囲気を作り出し、抽象絵画の誕生を準備し、さらにはフロイトによる精神分析の発見を可能にした。今日の我々が直面しているのは、以前とは異なった形での「外なる臓器」の危機であり、それにとまなう情動の変化である。つまり近代の原理（これはエディプス原理と同義である）は、フロイトの時代に1度、そして現在において再び屈曲点をむかえているのである。しかしこの近代の原理自体は今後も続いていくだろう。現在の我々の状況とはこの原理自体の変化ではなく、あくまでその重篤な機能不全であり、それは「外なる臓器」や絶対的な他者の変容によるものだと著者は論じている。

著者は本書で、近代の原理を明確にしたフロイト＝ラカンの精神分析を、臨床経験のなかで成熟させることにより、現在の状況の乗り越えを試みている。評者は著者の発表や論考には長年親しんでいるが、改めて舌を巻くのは、症例記載と理論的考察の接続の鮮やかさと、美的なセンスと倫理的な感覚にあふれた論述である。そしてこのような感性を持った精神科医が近頃稀有になってきたことを痛感するのだが、これもまた我々のポストモダンの一つの徴候なのだろうか。

(十川精神分析オフィス)

●四六判 184頁 2005 定価1,890円（本体1,800円＋税） 勉誠出版